

西郊民俗

第二六九号

令和六年（二〇二四）十二月

近江中山の芋競べ祭りにみる儀礼の特徴	板橋春夫	1
日本地名学研究所（前身、大和地名研究所）と柳田国男	前篇二		
―柳田国男と研究所との交流はいつから―	中葉博文	18
雑報		26

西郊民俗談話会

西郊民俗談話会会則

一、本会は西郊民俗談話会と称する。

二、本会は会員相互の連絡を保ちながら、民俗学の研究を推進することを目的とする。

三、本会は、次の事業を行う。

(1) 会誌『西郊民俗』等の発行。

(2) 研究会等の開催。

(3) その他。

四、本会の会員は本会の目的に賛同して入会の手続をとったものとする。

五、本会の会員は会費として年額二、〇〇〇円を納入するものとする。

六、本会は会務の執行のために委員若干名を置き、うち一名を代表委員とする。委員の選出は総会において行い、その任期は二年とする。

七、本会は必要に応じて顧問を置くことができる。

八、本会は少くとも毎年一回の総会を開催するものとする。

九、この会則の変更は総会の決議による。

『西郊民俗』投稿案内

『西郊民俗』は年四回(三・六・九・十二月)刊行しています。本会会員であれば、どなたでも投稿することができます。民俗学に関する報告・論説・記事であれば、いかなる地域のものでも自由に投稿してください。民俗学に関する論考・調査報告・資料紹介・翻刻・問題提起等、原稿の長短に関わらずお寄せください。短報も受け付けています。

投稿に際して次の点に留意してください。

一、投稿方法

原稿はできるだけ電子データ原稿をお願いします。本文・写真・図

表を収録したCD・メモリースティック等のデータメディアの郵送、またはEメール送信でお送り下さい。そのプリント紙を郵送して下さい。Eメール送信の場合でも、プリント紙は郵送して下さい。もちろん手書き原稿も受け付けています。

二、写真・図等

写真・図等は、電子データの本文に貼り付けしないで、写真・図一点ごとの別ファイルにしてください。本文に貼り付けると、データが小さくなり印刷に適しません。

三、校正

執筆者校正は、初校紙を郵送しますので、修正して返送して下さい。執筆者校正は初校のみとします。注の付け方、文法・文意の整理等、本文の体裁について、編集上の調整をお願いすることがあります。

四、『西郊民俗』PDFのインターネット公開

二五八号から、西郊民俗談話会のホームページにおいて、会誌の発行後一年を経過した時に、PDFによるインターネット公開を行います。今後の投稿に際して、インターネット公開を了承した上での投稿をお願いします。二五七号以前のバックナンバーのインターネット公開については、今後検討していきます。

五、原稿送り先 会誌編集担当

久野俊彦 〒329-0433 栃木県下野市緑四一六七

Eメール htotsano@yahoo.co.jp

『西郊民俗』バックナンバー案内

既刊分の会誌の販売価格は一部五〇〇円です。在庫分は二四九号から受け付けています。会務担当宛お申し込み下さい。

近江中山の芋競べ祭りにみる儀礼の特徴

板橋 春夫

はじめに

近江中山の芋競べ祭りは、滋賀県蒲生郡日野町中山の西谷と東谷の二集落で栽培した里芋（以下、芋と表記）を野神山の祭場に持ち寄る。複雑な儀礼を進行させながら、親芋から葉の先端までの長さを競う祭りである。行事は、山子・山若・オトナ（近年は「ミヤザ」と呼称）という年齢階梯的な組織によって運営されており、西谷と東谷に見られる男性原理と女性原理を基本に、対立・補完などの儀礼が演じられる。

本研究の目的は、この芋競べ祭りにおける儀礼の特徴を考察することにある。令和二年（二〇二〇）に新型コロナウイルス感染症（*COVID-19*）が拡大し、全国各地の祭りの多くは中断を余儀なくされた。コロナ禍の芋競べ祭りでは、東西の集落が掘り出した芋の長さを保存会が計測し勝敗を決めていた。¹⁾芋の長さで勝敗を決めたようであるが、この芋競べ祭りは半日に及ぶ複雑な儀礼にこそ核心があるように思われる。本研究では、儀礼の特徴に関する考察を通して祭りの核心に迫ってみたい。

坪井洋文の芋競べ祭り研究は、詳細なものであった。国立歴史民俗博物館の研究チームは、坪井の研究をさらに深めた調査報告書と映像記録を作成した。その詳細な記述が芋競べ祭り研究の到達点と理解されることになった。しかし、祭りの本質や儀礼の特徴に関する研究が十分に深まったわけではなく、明らかにすべき点や祭りの本質をめぐる分析・考察はまだ残されていると思う。しかし、その後の研究をみると、管見では蓼沼康子の論文がある程度である。まずは先行研究の批評から始めていきたい。

一 先行研究の批評

（一）中川泉三「江州中山の芋競べ祭」一九一六年

中川泉三「江州中山の芋競べ祭」は、芋競べ祭りを最初に紹介した論文である。大正五年（一九一六）の『郷土研究』四巻四号に掲載された。中川によると、芋競べ祭りは一村を東西二区に分け、その年に獲れた芋の大きさを競う祭りであるという。滋賀県蒲生郡の山寄りの村落では、正月初旬に山神の祭りが行われるが、中山では初秋に行われ祭りの形式も他の村落とは異なる。平安期創設の伝承を持つ金剛定寺の寺記に「喜応元己丑年大山祇神の霊告に任せて、恒例初秋山神の祭を始め、是を芋競と称す」とあり、「芋競」の名は古い。喜応元年（一一六九）の記録では、祭日は毎年八月十日とあるが明治以降は九月十日に変更したという。祭壇については、以下のように記される（傍線筆者）。

祭壇には檜の枝の三股なるを四本、股の方を上にして四隅の柱に立てる。長さ各五尺、其枝股を利用して青竹を以て棚を作り、棚の四方には櫛・ビシャコ・フクラソウ等の枝を飾り、其東西から里民が丹精を凝した里芋の最も長大なるものを選んで供へる。（中略）十四歳以下の村童東西より出て角力を取ることを三結、それより芋の長短を交べるので、東西互に立替つて寸法を改める。長短の勝負が定まれば勝つた方では大声歓呼して式は終るのである。（中川 一九一六 三〇）

この記述に続いて、西谷に残る丈尺の記録が文久二年（一八六二）から大正二年（一九一三）まであり、これを紹介し、明治三十九年（一九〇六）の八尺五寸八分が最長であることを述べる。東谷には同様の記録

が残らないので、過去における実際の勝敗は不明である。中川は金剛定寺の寺記に「恒例山神の祭り」と記されるのを根拠に、芋競べ祭りを山の神の祭りと認識したようであるが、芋競べ祭りは野神祭りの一つである。

（二）北原（青柳）真智子「双分制の一例―滋賀県中山の芋まつり―」 一九五六年

北原（青柳）真智子「双分制の一例―滋賀県中山の芋まつり―」は、昭和三十一年（一九五六）に発表された。双分制の視点から芋競べ祭りを分析した論文で、北原は中山の地域概要・家族類型・婚姻形態・同姓集団を論じ、地縁集団としての組と東谷・西谷・徳谷の三集落について

紹介した。社会構造を詳細

に論じたあとに祭りの分析を行い、祭祀組織として、十二人衆、山若衆、山子に分けて紹介した。沿革については、先行研究である中川論文を紹介し、行事故第は、西谷の小谷栄三家所蔵の大正六年（一九一七）の「行事故」を引用した。

芋の長さによって勝敗が決まる。この勝負は気象と稲作の年占を付随させている。西谷が勝つと照で豊作、東谷が勝つと多雨で凶作と

いう。西谷は東谷よりも耕地が低い位置で湿地であり、灌漑用水も十分である。東谷は土地が高く、西谷よりも乾燥地である。芋は非常に水分を好み、湿地でなければ生育しがたいから東谷の芋が良くできた年は多雨を示すことになる。豊作を願って故意に西谷を勝たせることはないという（写真1）。北原によると、西谷は東谷に先行して開発が進み、西谷の膨張に伴って東谷が創設されたが、さらに近世中期には徳谷を分村させたという。祭りの発生伝承としてのダダボシ（巨人伝説）の神話が伝わる。北原は、双分制の原理である互酬と対立の例として、芋の長さの対抗、相撲の対抗、芋の交換などを紹介した。なお、北原は「日本における双分制―特に祭を中心として―」で、関西の宮座にみられる双分制を論じたが、同論文には芋競べ祭りへの言及はない。

（三）安井吉史『近江中山の芋競べ祭り調査報告書』一九五八年

熊野神社の安井吉史宮司は、滋賀県文化財保護条例により昭和三十三年（一九五八）二月一日に記録作成等助成すべき無形の民俗資料として選択された「中山いもくらべ祭」の調査報告書を執筆した。安井は、この祭りを「野神祭」とであると主張する。祭場は集落で一番高い野神山の山頂である。栗の葉をムカデが這うように敷き並べるが、これをムカデ道と称した。明治四十年（一九〇八）まで祭りの当屋制は存在したが、翌明治四十一年（一九〇九）の神社合祀の際に当屋制が廃止された。山若は東谷から八名、西谷から七名が出ていたが、これも神社合祀のときに同数の七名ずつに変更した。東谷が女神、西谷が男神と伝承される。服装・持ち物・儀式の作法に至るまで明確な差異について、神座・神の膳・吊り石・銚子・服装・錫杖・儀礼に関して詳細な解説をした。同書には多数の写真が掲載されており、芋競べ祭りの理解に役立つ。



写真1 東西の三番尉による芋打ち

(四) 坪井洋文「芋くらべ祭―滋賀県蒲生郡日野町中山―」一九八七年

坪井洋文が『国立歴史民俗博物館研究報告』一五集（一九八七年）に発表した「芋くらべ祭―滋賀県蒲生郡日野町中山―」は、祭りを一九七七、七八、七九年と三年続けて観察調査した成果をまとめた論文である。同論文は、坪井の没後に記念論文集『神道の神と民俗的神』（未来社、一九八九年）に再録された。

芋競べ祭りは、西谷と東谷がほぼ同時進行で準備していくので、一人の研究者が両方を見学するには数年を要し、同じ年に全体を俯瞰することは不可能である。坪井は西谷の寺院を宿にすることが多かったので、調査の内容も西谷に比重が置かれた。起原神話としてダダボシと呼ばれる巨人伝説が伝わる。モッコに泥を入れて運んでいるときに棒が折れて泥が落ちて小さな丸山ができ、さらにモッコの土をふるうと一個の山ができた。それが野神山であるという。折れたズイキの棒を測ったのが芋競べ祭りの由来であるという。坪井は、西谷と東谷の位置図、祭場の実測図を作成し、西谷と東谷の比較を試みた。

(五) 岡本信男「近江中山芋くらべ祭」と「近江の芋くらべ祭―蒲生郡日野町―」一九八九年

地元で祭りに関わってきた岡本信男は、平成元年（一九八九）に同保存会から『近江中山芋くらべ祭』を刊行した。同書は、B五判、カラー口絵一五頁、本文一四二頁の本格的な調査報告書である。図版は坪井の論文からの引用がほとんどであり、古い写真は安井の報告書からの引用である。地元ならではの聞き取りや写真が多数掲載され、祭りの理解に効果的である。岡本には「近江の芋くらべ祭―蒲生郡日野町―」の論考で、儀礼を簡略に解説した。ムカデ道は神様を迎えるための「迎え出のみち」が訛ったものと紹介した。

(六) 上野和男・岩本通弥・橋本裕之「近江中山の芋くらべ祭―映像民俗誌『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』の記録―」一九九一年

国立歴史民俗博物館の研究チーム（上野和男・岩本通弥・橋本裕之の三人）が「近江中山の芋くらべ祭―映像民俗誌『芋くらべ祭の村―近江中山民俗誌―』の記録―」を『国立歴史民俗博物館研究報告』三二集（一九九一年）に報告した。四〇時間に及ぶ映像記録とそのデータを基に、制作過程で得られた資料を提示した。結果として坪井論文を補充する内容になっているが、坪井が明らかにしていなかった所作の分析をはじめ、祭りの全体的構造についても詳細な分析が行われている。その点では、複数の調査員による地区別の祭り準備から祭りの終了までを詳細に記録した意義は大きい。中山の芋競べ祭りに関連する類例行事である、上三十坪集落と徳谷集落の二箇所の野神祭りの観察報告と比較も行っている。同論文では、表「東谷と西谷の差異」が載り、祭具・芋飾り・服装・儀礼の四項目を比較している。西谷の神座では枝葉は三種類であり、サカキは使われていないのでこの点は事実誤認であろう。なお、同論文でも芋競べ祭りを畑作儀礼と認定することが困難であるという指摘はなされている。

(七) 蓼沼康子「近江中山の芋くらべ祭と女性」一九九三年

蓼沼康子の論文「近江中山の芋くらべ祭と女性」は、祭りにおける儀礼をまとめながら、山若やオトナが役割を果たす上で、母親や妻の協力が重要である点に注目した。宮座の最長老の神主は、祭りのために餅を搗くが、そのときに女性は一切手を貸さない。しかし、オリ（御鯉）と呼ぶ鯉を模した神饌は、各家庭の女性が制作している。神職はそれらの供物を社務所に届ける。供物の準備はオトナの妻や山若の母親たちが関

わっているが、芋競べ祭りに直接女性が参加することは許されていない。かつては、祭場である野神山に上山することも嫌われたという〔蓼沼一九九三 八〕。女性の穢れ感に基づいて祭り儀礼が執行されるが、実際には女性の積極的な助力がないと祭りは成り立たないことを論じた。

二 先行研究にみる祭り理解と方法的課題

(一) 先行研究の祭り理解の到達点

本研究の対象とする「近江中山の芋競べ祭り」(指定名称)は、平成三年(一九九一)に国指定重要無形民俗文化財に指定され、毎年九月第一日曜日に実施されている。この芋競べ祭りを民俗学界に初めて紹介したのは中川泉三であった。中川の論文「江州中山の芋競べ祭」は、大正五年(一九一六)の『郷土研究』四巻四号に掲載された。中川は、一村を東西二区に分けてその年に獲れた芋の長さを競う祭りであり、中世以降続くと紹介した。祭りの存在と歴史性を論じた功績は大きい。

祭りの原理を双分制という分析概念で論じたのは北原真智子を嚆矢とする。西谷は東谷に先行して開発が進み、西谷の膨張に伴って東谷ができ、さらに江戸期に徳谷が分村した歴史的開発について述べた後、双分制原理に顕著な互酬と対立について、芋の長さの対抗、相撲の対抗、そして芋の交換を紹介した。北原論文は双分的な項目の要素があるという紹介に留まっている。

安井吉史は、神職の立場から芋競べ祭りは山神祭りではなく、正しくは野神祭りであると主張した。⁽²⁾ 明治四十一年(一九〇九)の神社合祀で当屋制が廃止され、芋競べ祭りも再編されたことを解説した。東谷は女神、西谷は男神と伝承され、服装・持ち物・儀式の作法に至るまで明確な差異があるという。神座・神の膳・吊り石・銚子・服装・錫杖・儀礼に至るまで詳細な解説をしたが、それらの意味についての考察まで踏

み込んではいない。

坪井洋文は、芋の象徴性に着目して、「芋くらべ祭―滋賀県蒲生郡日野町中山―」を執筆した。祭りの詳細を知る上で欠かせない重要な論文である。坪井は西谷の寺院を宿にしたので調査事例が西谷に偏りがちであり、しかも芋の象徴性を強調する儀礼へと収斂する論となっており、読み取りには注意が必要と考える。岡本信男は、ムカデ道について取り上げ、神様を迎えるための「迎え出のみち」が訛ったものと紹介したが、ムカデの錫杖には言及がない。国立歴史民俗博物館の研究チームの論文は、祭りを準備から観察して詳細な記録をまとめた画期的業績である。映像データを基に制作過程で得られた資料によって坪井論文の補充を旨とし、所作の分析と祭りの全体的構造の考察を試みた。しかし、細かな点については誤認も認められる。

(二) 祭りの分析視点

芋競べ祭りは現在、地元の保存会の中でも祭りの説明にあたっては、男性性と女性性が存在することを強調することが多い。実際にそれを強調する演技が行われている。古くは男性優位の時代が続いたと仮定すれば、当然男性性を強調する西谷がいずれも優位であるはずである。西谷のほうが開発が早く、地形地質に関しても優越している。そのような歴史的地理的条件を加味すれば、その優位は揺るがないはずである。男性性を強調する西谷がなぜ負けなければならないのか。それは勝敗を決する判断材料が地中に生えている芋を掘り出して優劣を決めるためである。この判定は、神のみぞ知るといふ神意を重視する思考でもあった。そこに神聖性が登場するのである。

祭りの中における勝敗の判定では、西谷と東谷のいずれの集落も負けを認めようとはしない。その状態が延々と続くのである。三番尉が酔っ

た振りをして、ひと言も発せずと同じ動作を長々と演じ続けているのはそのためである。

岡本は、ムカデ道を「迎え出のみち」と語呂合わせて説明したが、錫杖の蛇とムカデの図像などの検討の必要性も感じる。また、筆者が見学した際に不思議だと思ったのは、石積み祭の祭場と常緑樹が飾られる神座であった（写真2）。

特異な芋競べ祭りであるが、類例はないだろうか。類例は存在していた。国立歴史民俗博物館の調査チームが現地調査を実施している。中山からの分村と言われる徳谷の野神祭りには類似的要素がたくさん見いだせるのである。徳谷では、掘り出した芋を竹にくくりつける、笏にムカデとマムシの絵を描く、ジョウジャク（丈尺）を用意する、規模は小さいが石畳の祭場である、子どもが奉納相撲が実施される、などいくつかの共通する点がある。しかし、芋の



写真2 神座（西谷）

長さを競うことはない。もう一箇所、上三十坪の野神祭りはズイキ祭りと呼ばれ、祭場に竹矢来を設置している。野神に供えるための神の膳を作成したり、ズイキで鳥居状のものを作って飾っている。こちらの祭りは簡略化が進んでいるようであるが、中山の芋競べ祭りのいくつかの要素を残して

いると思われる⁽³⁾。

芋競べ祭りの考察に際して、どのような分析視点を採用すべきであろうか。祭りの基調とも言える〈競争〉があり、そのために西谷と東谷という明確な地域区分が存在している。その点に着目するのが最も自然であろう。この地域区分に関しては、保存会の皆さんも祭りの執行にあたって常に意識している重要な原理なのである。祭場に置かれた大きな芋石を中心に、東と西という二つの地域区分が厳格に分けられる。祭りが始まる前から、東西の役員たちは相互に行き来をしないとされる。また、西谷と東谷の両地区は、祭りの中で〈男性性と女性性〉という原理にもとづいて、役員が祭りの中で〈競争〉を演出していく。性差による競争の儀礼にも着目する意義はある。地域区分としての西谷と東谷はもちろん、性差による〈男性性と女性性〉という二つは、互いを合わせると一つに収斂する統合原理を秘めている。以下の記述では、西谷を先に記述し、次に東谷の順で論述していく。

三 芋の選定と飾り付け―東谷の場合―

坪井のモノグラフが西谷に偏していることは上述した。ここではそれを補う意味からも、東谷の事例を紹介する意義は高いと思われる。筆者は、令和元年（二〇一九）九月一日、午前五時三十分、東谷の「憩いの家」に着いた。芋を飾り付ける場所であるが、まだ人影はなかった。西谷は午前四時三十分集合であるという。東谷は午前六時集合であったので、しばらく待つと徐々に作業着姿の人たちが集まり始めた。

軽トラック三台に分乗し、手分けして芋を掘り出すという。日野町教育委員会の振角氏の交渉のおかげで、筆者らは急きょ一台の軽トラックの荷台に乗せてもらえることになった。行き先は「今年一番」の下馬評があるT家の芋畑である。到着すると、奥さんが対応していたが、芋競



写真3 掘り出した芋（東谷）

べ祭りに出されることは名誉なことであると語っていた。保存会の望月喜三郎会長が「まわりのやつは駄目になるかわらんが、ズボットやっていいから」と作業着の若者に説明していた。二人の若者は「山若」と呼ばれる人たちである。持参したスコップで一気に掘り出した。芋はその場でホースの水できれいに洗われた。望月会長は、筆者に「芋も洗うてもろて、うれしおます」と説明してくれた。一方、山若へは「寝かせておきい、立てておかんと」と厳しく注意を与える。芋を立ててしまうと、芋が折れてしまうことがあるという（写真3）。

十数分の作業が済むと、会長たちはT家の人にお礼を言いながら、軽トラックで憩いの家へ戻った。筆者らの軽トラックが最後で、既に二台の軽トラックの面々は外流しで芋を洗い直している。洗い終わると、青いビニールシートの上にていねいに寝かせて計測していく。一番、二番と並べ直す。一番長いと思われるいたT家の芋は計測の結果、二番目であった。そのことについて、会長は「掘り起こしてみんとわかりません」と説明してくれた。それはその通りであるが、事前に各家で育てている芋を何度か巡回して大きさを大まかに計測していることを知った。育った芋に対して、目視では一番長いと思って

いた芋が二番目であった。東谷で一番長い芋は二〇六センチを計測した。これを勝負に出すのである。芋は、平均的な大人の身長を超え、プロバスケット選手並みの高さになっていた。

役員は、三本の芋の長さをそれぞれメモしていた。そのときに会長の携帯電話が鳴った。何やら一所懸命に説明している。電話を切ると、会長は筆者に向かって「西は子芋からはかるのかと聞いてきたから、親芋からや、と教えたんや」と電話の内容を解説してくれた。そしてしばらくすると、会長は「ジョウジャク、昨年のを持ってきて」と役員に声を掛けた。昨年のジョウジャクで計ってみる。役員が芋を飾り付けている間、山若たちは憩いの家で、扇風機を用いて糸を撚っていたのである。論文や報告書を読んで、作業手順はある程度理解しているつもりでいても、現地で実際に進行している様子を見学すると立体的に理解できるものである。同じ作業が、西谷と東谷でそれぞれ同時進行で行われているが、筆者の調査した東谷でも、一人ひとりの役割に応じた仕事と同時に進行で経過していく。

太い竹にしばって飾り付けるが、縄作りの時は「国益式藁打機」のラベルが貼られた縄^{なわ}縄い器が現役であった。これを使ってあらかじめ縄を用意しておく。注連縄の先端を三つに分ける。西谷はこれが二つに分かれるという。作り方が異なるのである。東谷は一つのくくりで三つに分けるので、都合九個の玉ができる。一方、西谷は一つのくくりで二つに分けてしまう（写真4・5）。東谷では玉を膨らませて見栄えを良くするために、あらかじめ、あんこを入れる。そのあんこはソフトボールくらいの大きなあんこである。買ひ物の白いビニール袋を大事そうに持ってきた役員がいたが、中に何が入っているか気になっていた。そのビニール袋から九つのボール状のあんこを出した。芋の葉がポキッと折れないように割り竹を使って補強する。この竹を「芋竹」と呼んでいた。白



写真4 芋飾り（西谷）



写真5 芋飾り（東谷）

い芋の根をきれいに揃え、白い紙を擦った元結びでしばる。七五三に輪を付ける。網のように飾るが、玉に掛かるように飾り付けを進めていくために意外と時間がかかった。この飾りを「亀の甲」と呼ぶと教えてもらった。

四 芋競べ祭りの諸役

（一）祭礼を総括するオトナ（近年は「ミヤザ」と呼称）

明治四十一年（一九〇八）の神社合祀の際に当屋制が廃止され、それに代わって熊野神社の宮座が関わるようになった。山若の経験を持ち、祭礼全般を総括する長老を「オトナ（大老人）」と呼んでいた。現在、地元ではこのオトナの用語を耳にすることはなく、オトナの代わりに

「ミヤザ（宮座）」と呼んでいる。ミヤザの定員は、東谷六名、西谷六名の計一二名と定められている。このうち、年長者二名が神主と呼ばれる。押上式に東西が交代で正副の神主になるのが通例という。ミヤザは、芋競べ祭りの儀礼には直接参加せず、補助的な役割を担当している。芋競べ祭り保存会の役員を兼ねている。

（二）儀礼の中心的役割を務める山若

山若は、祭礼の中心的役割を演じる。西谷八名、東谷九名であつたが、現在は両地区七名ずつになっている。かつては相続人の男子とされていたので多くは長男が参加していた。どちらも入会順に序列があり、最上位を一番尉しやうといい、以下二番尉、三番尉、四番尉、五番尉、六番尉、七番尉と続く。一番尉は、神事に接する重要な役割であるために神座そばにすわる。二番尉は神事を進行させる役目で、芋競べの結果を判定する重要な

役目を帯びている。二番尉は勝負を円滑に進行させるための手腕が求められる。三番尉は、芋競べを直接実施する芋打ちの当事者である。神の盃の儀礼では補佐役を務める。また、神の相撲の際は行司役を務めるなど、多彩な役割を課せられ最も活躍する役目である。四番尉以下もわずかであるが役割を持っている。行政の立場から祭りの維持に関わっている矢田直樹によると、西谷の人口減少の問題は課題になっていたが、平成二十八年（二〇一六）に芋競べ祭りの主役である山若の人数が少なくなる危機が訪れたという。⁵⁾

（三）祭りに奉仕する山子

山子は祭りに奉祀する八歳以上十四歳までの男子である。年長順に一



写真6 ムカデ道（東谷）

番、二番、三番と、番号で呼ばれる。祭場の準備と清掃などが主な役目である。現在、祭りは九月第一日曜が祭日であるが、昔は九月十日であった。九月一日から学校を一時間だけ早退できるように役員が学校へお願いに行ったという。現在は八月二十五日から始める。昔は集落から水を持って行き、丸石をていねいに洗った。現在は水道水で洗っている。そして、再び敷き詰める。東谷は、今も栗の葉を敷いてムカデ道を作っている（写真6）。昔は西谷もムカデ道を作っていたという。祭りでは神の相撲の取り組みを行う。

（四）祭りの裏方を務めるカッテ（勝手）

カッテ（勝手）は台所の賄いをするところから用いられた用語であろう。祭礼の進行の補助的な役割を持っている。勝手は山若経験者となる。この勝手の活躍も見逃せない。伝承や作法の指導を行い、祭りでは東西とも紋付き羽織袴姿で最上の隅に控えて祭り進行の裏方になう役目である。

五 芋競べ祭りの問答と所作

祭りは、西谷と東谷の境に位置する標高約一五〇メートルの野神山の山頂で行われる（図1）。祭場では古式とおりの複雑な儀式が行われるが、その祭場を整備するのが山子とその家族と役員である。祭場に敷き詰めてある丸石を「石めぐり」と言って、いったん取り除く作業を行う。取り除いた石はきれいに洗われ、再び敷き詰められる。この清掃の際、山子たちは東西の境界を越えたりはしない（上野ほか 一九九一 一八七～一八八）。祭り当日は、太鼓の合図で芋を山子に担がせて熊野神社へ向かう。実際には役員が担いでいることが多いようである。

社務所で三三九度の盃を行うが、この儀式は、かつて西谷と東谷のそれぞれの当屋で行っていた儀礼である。儀式が済むと、二番尉が「山へ登ってはいかがでござるか」と問う。すると、副の二番尉が「いかにもよろしい」と答える。これを東西がそれぞれ順に伝えていく。そして山

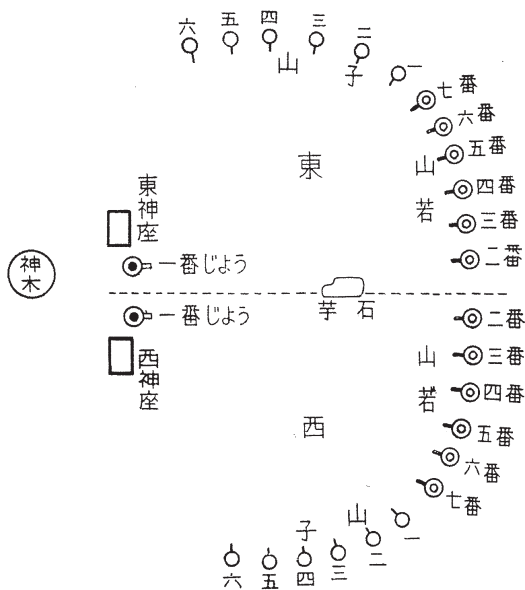


図1 野上山の祭場図
（『近江中山の芋競べ祭り調査報告書』より転載）

若と山子が野神山へ向かう段取りとなる。山子は「ソウライ、ワアライ」の掛け声を唱えながら野神山へ向かう。西谷と東谷は別々に専用の道を登ることになっている。

祭場に到着後、以下のような順序で神事が進んでいく。記述にあたつては、「近江中山の芋くらべ祭―映像民俗誌『芋くらべ祭り村―近江中山民俗誌―』の記録―」に記された祭り順序を参考にして、筆者の現地調査資料を加えた〔上野ほか 一九九一 一五五―一五六〕。口上を述べるのは二番尉が中心である。口上以外には会話は無い。儀礼の全体を通して、言葉を発するのは、限られた役の者だけである点も特徴である。

①水回し

二番尉が「水回しをしてはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。神に詣でる前の口すぎである。

②神を拝する

二番尉が「神を拝してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。神を拝するのは山若全員が一緒に行う。

③芋を供える

二番尉が「芋を供えてはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。芋を上座の左右にある松の木に立て掛ける。

④神を拝する

②と同じである。二番尉が「神を拝してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。



写真7 神の膳（西谷）



写真8 神の膳（東谷）

神を拝するのは山若全員が一緒に行う。

⑤神の膳に供える

二番尉が「神の膳を供えてはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。神の膳・神饌の数々を供える（写真7・8）。

⑥神を拝する

②と同じである。二番尉が「神を拝してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。神を拝するのは山若全員が一緒に行う。

⑦神の三三九度

二番尉が「神の三三九度の盃をしてはいかがでござるか」と相手の二

番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。東西で作法が異なるが、神座にはくようにして進ぜる。

⑧ 神を拝する

②と同じである。二番尉が「神を拝してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。神を拝するのは山若全員が一緒に行う。

⑨ 我々の膳

二番尉が「我々の膳を出してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。膳・箸・餅・オリ（御鯉）・ブト（米粉で作った団子状のもの）・センバ・カモウリ・ササゲの順で出す（写真9）。



写真9 供え物（手前はズイキ、奥はオリ）

⑩ カワセのハンギリを出す

二番尉が「カワセのハンギリを出してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。カワセは交換を意味し、ハンギリの中にはお互いの献上品である人形が入っている。これを東西で交換する。

⑪ 神を拝する

②と同じである。二番尉が「神を拝してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろ

しい」と答える。神を拝するのは山若全員が一緒に行う。

⑫ 神の膳を下げる

二番尉が「神の膳を下げてはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。一番尉が神座の棚から神饌を下げる。

⑬ 神を拝する

②と同じである。二番尉が「神を拝してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。神を拝するのは山若全員が一緒に行う。

⑭ 我々の膳を下げる

二番尉が「我々の膳を下げてはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。各自が持参した風呂敷を膳の前に置いて片付ける。

⑮ 我々の三三九度の盃

二番尉が「我々の三三九度の盃をしてはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。盃に酒を注いでいく。

⑯ 一番二番の酒肴を出す、一番二番の流れ盃をする

⑰ 芋打ちの酒肴

二番尉が「芋打ちの酒肴を出してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。土器かわらけの盃と肴が出る。芋打ちは何杯もの酒を所望して飲む。ここは見学者にとっては見所の場面である。

⑱ 吊り石を切る

二番尉が「吊り石を切ってはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。東西の四番尉が小刀で吊り石を切り落とす。山子が出てきて、吊り石を持っていく。

⑱ 神の相撲

二番尉が「神の相撲をとらしてはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。東西で相撲の儀礼を行う。

⑳ 芋を出す

二番尉が「芋を出してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。芋を祭場の中央に出す。

㉑ 芋打ち

二番尉が「芋を打ってはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。ジョウジャクを改めて、何度も複雑な所作を繰り返して計測を行う。最終の勝敗を決める大事な儀礼である。ここから東西の三番尉がそれぞれ芋打ちを始める。酔っていることを身振りで示しながら、芋打ちの動作も大仰に進めていくが、ほとんど無言のまま延々と演じ続けるのである。⁽⁶⁾



写真10 芋競べの開始

振りで示しながら、芋打ちの動作も大仰に進めていくが、ほとんど無言のまま延々と演じ続けるのである。⁽⁶⁾この芋打ちの無言劇は、観客にとっても見ていて大変面白い場面であろう（写真10）。

㉒ 東西の芋の交換

二番尉が「芋の長短もあい計りますれば、例年のとおり、芋を取り替えてはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。そ

して、「尋常、尋常、尋常」と三回唱えながら芋を取り替える（写真11）。

㉓ 神を拝する

②と同じである。二番尉が「神を拝してはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。神を拝するのは山若全員が一緒に行う。

㉔ 山を下りる

二番尉が「まずは祭礼も滞りなく相済み、これにてお別れしてはいかがでござるか」と相手の二番尉に問うと、「いかにもよろしい」と答える。そして全員に「山をおりること」と言い継ぎをする。

儀礼の順序は上述のようであるが、大変

手の込んだ儀礼行事になっている。祭りの見せ場はいくつかあるのだが、最も重要な見せ場は「㉑芋打ち」の儀式であろう。芋を打つというのは芋の長さを測ることである。測る道具はジョウジャクで、事前に当番の三番尉が制作する。祭り前日に当番の山若の三番尉が直径二寸の桜の木を長さ八寸の輪切りにし、集会所に持参する。桜の木を二つに割って東西で持ち帰る。これでジョウジャクの長さが同じであることになる。当日は、本当に二つに割ったものかどうかを確認するための「ジョウジャク改め」の儀式が行われる。

祭りが終わると、年号と芋の長さを記して保存する。芋の測り方はジョウジャクを宛て、その都度、四番尉が扇子で位置を押さえる。これを繰り返して測り終えるのである。打ち終わると、三番尉は打った数だけ

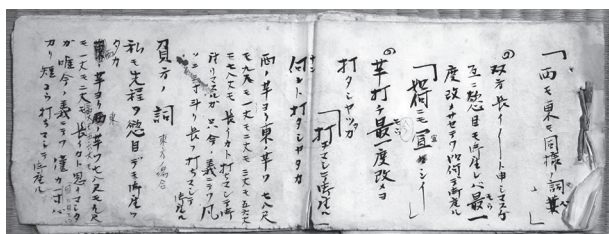


写真11 『芋競べ式次第 東谷』（部分）



写真12 西谷の三番尉はステテコ姿



写真13 三番尉による芋打ちのクライマックス

の神の踊りをする。そのしぐさは酒に酔った千鳥足であり、大げさに身体を振り動かす。そのパフォーマンスは踊りそのものである(写真12)。無言劇のしぐさを繰り返す。

ゆっくり時間をかけてジョウジャクを用いた芋打ちが行われ、お互いにそれぞれの芋の長さを報告する。そのときに初めて三番尉は大きな声で口上を述べる。お互いにその報告に納得しないそぶりをして、再び何回も測り直すのである。そのしぐさと口上は実にゆったりとしている。東西の三番尉は、酒を強いられた後、ふらふらとした千鳥足のしぐさをしていた。そのしぐさをするだけでも酔いが回ってしまうと思われる。そして芋を何度も測り直すのである。見物客はそのしぐさを見て楽しんでいた。三番尉は酒に酔った足取りで、ジョウジャクと呼ぶ割り木を手

に、親芋から葉の先端までの長さを何度も測る。自分の集落の芋のほうが長いことを互いが何度も主張するため一向に勝敗が決まらない。西谷の三番尉が「目に見えんばかりみじこう打ちましてござる」と口上を述べた。これは東谷が五年ぶりに勝った瞬間である(写真13)。

勝負が決すると、初めて「②東西の芋の交換」となる。その時点を境にして、初めて相手の領域へ出入りが可能となる。この神事では、神木を中心に東西の神座が設けられる。東西の境目に置かれた芋石を基準に東西の厳格な境界線が作られ、行事が始まると、芋打ちの三番尉と係の人だけは相手の領域へ入ることができるが、それ以外の人は決して越境できないことになっている。

六 西谷と東谷における儀礼原理

(一) 西谷と東谷の比較

芋の長さを競う儀礼には〈競争〉の原理が底流にある。比べて勝ち負けを決め、西谷が勝てば稲が豊作という。東谷が勝てば不作であるという。また、勝ったほうの村が一年間は村政の主導権を握るとされた。すると、かつての村政は九月始まりということになるのだろうか。芋の長さはジョウジャクと呼ぶ定規で計測するが、きわめて儀礼的に演じられる。計測を「芋打ち」と呼ぶ。酒を注ぐ所作は「リキマ」と称して、一種独特な優雅で大仰な演じ方をする。見ていても面白いのである。その芋くらべ儀礼における、①祭具、②芋飾り、③服装、④儀礼について、西谷と東谷について比較してみると、「表1 西谷と東谷の比較一覧」のようになる。

表1 西谷と東谷の比較一覧

	事 項	西谷（男性原理）	東谷（女性原理）	異同内容
①祭具	笏	（表面）剣 （裏面）ムカデ	（表面）マムシ （裏面）ムカデ	異なる 同じ
	神座の棚	真竹の皮部を上、身を下に編む。	真竹の身を上に、皮部を下に編む。	逆
	神座の枝葉	アセビ・フクラソウ・ビシャコの三種を一束にし、四か所に挿す。吊り石を切る前に一か所だけ残す。	サカキ・フクラソウ・ビシャコ・アセビをそれぞれ四か所に挿す。吊り石を切る前にサカキの束だけ残す。	補完
	神の膳	シチクダケ（オトコ竹ともいう）で皮を下に編む。東谷よりも小さく作る。シチクダケ非食用。ハチクダケ食用。	篠竹（オナゴ竹という）で皮を下に編む。西谷よりも大きく作る。	男と女・逆
	神の箸	柄の部分を紙で巻く。	柄の部分を残し、それ以外は皮をむく。	異なる
	吊り石（カナイシ）	草むらに隠しておく。	四番の山子の家が一年間保管する。	異なる
	銚子の水引	紅・白。結び目は十二。閏年は十三。	赤・金。結び目は十二。閏年は十三。	補完
	銚子の蝶型	雄	雌	男と女
	盃	三方にそのまま盃を載せる。	三方に紙を敷いて盃を載せる。	異なる
	ダシ	底に芋の葉を敷く。	底にヒノキの葉を敷く。	異なる
	米粉の餅	シロモチと呼ぶ。	ブトと呼ぶ。	異なる
②芋飾り	丈 尺（ジョウジャク）	水引で芋竹にしぼる。	縄で芋竹にしぼる。	異なる
	紙飾り	芋全体に付ける。	根元だけに付ける。	異なる
	タマ	タマは6つ作る。	タマは9つ作る。	異なる
③服装	一番尉の紋	束ね熨斗	上下対鶴	異なる
	三番尉の芋打ちのいでたち	袴をめぐってステテコを見せる。	袴はそのまま。	男と女
	山若	黒足袋・黒い鼻緒の桐下駄	白足袋・白い鼻緒の草履	男と女
	山子	下駄	藁草履	異なる
④儀礼	全体的な動作	全体に荒々しい。	全体におしとやか。	男と女
	水回し	丸石の上に水を吐き出す。口をすすいだ水を丸石の上に吐き出す。	水を軽く口に含む。盃に残った水は丸石の上にこぼす。	異なる
	神を拝する	両手を広げて後ろ回しにして一礼。	二拍手一礼する。	異なる
	神の膳を供える	渡す山若だけが動く。	受け渡しの方が一歩動く。	異なる
	ハンギリ	肩に載せる。	両手で持つ。	異なる
	神の三三九度	三方の上に載せて、神座の膳に9回酒をかける。	直接盃を持ち、神座の膳に酒を3回かける。	異なる
	吾々の膳	左膝を地面につけて酒を注ぐ。所作は荒々しく酒をこぼすように注ぐ。	蹲踞のまま、ていねいに酒を注ぐ。	異なる
	膳に供える順序	餅→ブト	餅→御鯉	異なる
	膳の下げかた	左手をつき、前のめりになって両手で膳を持ち上げて徹する。	両手を大きく広げて後ろ回しに一回、前回しに一回まわした後、両手で膳を持ち上げて徹する。	異なる
	一番二番の酒肴	放り投げるように膳を据える。	ていねいに膳を据える。	男と女
	芋打ちの酒肴	三方に紙が敷かれず直に盃を載せる。	三方に紙が敷かれる。	異なる
	神の相撲	日の丸の扇子。東谷よりも小さい。扇子を両手に挟んで垂直に持ち上げる。	日の丸の扇子。西谷よりも大きい。扇子を片手に持ち、正面に上げる。	異なる

(二) 男神と女神に基づく儀礼原理

地元では、西谷が男神、東谷が女神と伝承されており、儀礼の多くは男性原理と女性原理で構成される。保存会長の望月喜三郎氏（調査時）が「東は女の神様で、西は男の神様です。そのために東谷はていねいで、西谷は荒々しい。三番尉は袴をめぐってスエテコを見せますが、東谷の三番尉はどんなに暑くても袴をまくってはいかんのです」と教えてくれた。祭りに直接関わる人たちの認識でも、西谷は荒々しく振る舞い、東谷はしとやかな動作が特徴であると考えている。色のイメージは、西谷が黒、東谷が白である。次に、男性原理と女性原理が顕著な事項について検討していきたい。

① 祭具

神の膳は、男性原理と女性原理の差が顕著である。西谷はシチクダケを用いるのに対し、東谷は篠竹を用いる。地元ではシチクダケは「おとこ竹」とも呼ばれ、一方の篠竹は「おなご竹」と通称される。銚子の雄蝶雌蝶を見ると、西谷は雄蝶で、東谷は雌蝶である。

② 服装

祭りの服装を見ると、三番尉の芋打ちは東西いずれも羽織袴を着用する。西谷の三番尉は袴のすそをめぐってステコを見せて男性性を強調する。東谷の三番尉は袴のままであるなど、東西の三番尉の支度は、男性と女性の差異を視覚的に表している。山若の足元に注目すると、西谷の山若は黒足袋で黒い鼻緒の桐下駄を履いている。それに対し、東谷の山若は白足袋で白い鼻緒の草履を履いている。これは西谷が男性らしい履き物、東谷が女性らしい履き物を視覚的に表現している。さらに所作をみていくと、西谷は荒々しく（男性的）、東谷はおしとやか（女性的）である。

③ 儀礼に見る男性と女性の差異

儀礼では、さらに男性と女性のしぐさに関する差異は明瞭化される。水回しでは、西谷は口に含んだ水を丸石の上に吐き出す。それに対し、東谷は水を軽く口に含み、盃に残った水は静かに丸石の上にこぼす。西谷はハンギリを肩に載せて運ぶが、東谷はハンギリを両手で持つ。酒肴の扱いに関して、西谷は放り投げるように膳を据えるが、東谷はていねいに膳を据える、という男性と女性の差異がみられるのである。

(三) 対抗の原理と補完の原理

すべての事柄に関して、西谷が男性原理、東谷が女性原理というわけではない。そのいくつかについて、以下に指摘してみる。

① 神の膳

神の膳は、東西によって大きさが異なる。夫婦茶碗の発想からすれば、大きいほうが男性用で、小さいほうが女性用となる。しかし芋競べ祭りでは、男性原理とされる西谷の神の膳は小さく、女性原理とされる東谷の神の膳のほうが大きい。この事実、男性の膳が大、女性の膳が小という先入観と異なる。

② ジョウジャクの飾り

ジョウジャクは、芋竹にしばり付けられる。西谷は水引を用い、東谷は縄を用いる。水引と縄を比べた場合、水引は繊細で女性的な印象があり、縄は荒々しく男性的な印象である。しかし、これも一般に予想される常識と異なる。この丈尺をしばることに関しては、荒々しさと繊細さとは違う原理が働いているように思う。たとえば水引は神聖、縄は俗的という見方が考えられる。

③ 笏に描かれた図像

笏に関しては、西谷は太く短い。東谷は細く長い、笏にはどちらも裏



写真14 一番尉が持つ笏のムカデ（西谷）

面にムカデが描かれる（写真14）。表面を見ると、西谷は剣が描かれ、東谷はマムシが描かれる、この違いはどう理解したらよいであろうか。長い笏が男性性を表現するとしたならば、笏に関しては逆である。笏の場合は長さによる違いなのか、あるいは幅の大小による違いなのか不明である。若尾五雄は「百足と金工」で、芋競べ祭りで野神山に登る山道に栗の葉を並べるムカデ道に着目した。中山が昔あった場所は赤目といい、鉄分のために真つ赤になった湧水があるという。若尾は「芋茎Ⅱいもじ、鋳物師Ⅱいもじ」と同音であり、金石を切り落としてから祭りが始まる点に着目し、「芋競べⅡ鋳物師競べ」であった可能性を推論した〔若尾 一九七三 六二〕。ムカデ道はムカデが山頂へ集まる伝承を可視化したものである。

④ 神座に供えた枝葉

神座に供えた枝葉の処理は複雑である。西谷はアセビ・ビシヤコ・フクラソウの三種を一束として残す。東谷はサカキ一束を残す。祭りでは西谷と東谷を合わせると四種の照葉樹林の樹木の枝葉を供えたことになるが、西谷はサカキを用いないのである。今でも中山の家々では、毎月

一日と十五日に神棚にサカキを供えている。サカキは神祭には欠かせない樹木であるが、西谷が芋競べ祭りの神座にサカキを用いない理由は不明という。

東西を一つに合わせると四つの樹種が揃う。つまり東西でワンセットという関係である。これは対抗ではなく（連帯と協力）という原理と言えるであろう。向かって手前左から時計回りとは反対に、アゼボ、ビシヤコ（Ⅱヒサカキ）、フクラソウ（Ⅱソヨゴ）、サカキの順に挿していった。ビシヤコはサカキに似ており黒い実ができる。フクラソウは赤い実ができる。祭りが始まる前に、サカキだけを残して取り除いてしまう。なぜそうするのかについては伝承されていない。

⑤ 儀礼進行の優劣

儀礼は、常に西谷が先に始める。西谷の二番尉が「水回しにしてはいかがでござるか」と問いを発すると、それに呼応して東の二番尉は「いかにもよろし」と答える。このように必ず西谷が問いを最初に発するので、優先権は西谷にあると言える。それは西谷から開発されていたことに関係しているように思われる。

⑥ 扇子の大きさ

神の相撲の際には、扇子が用いられる。この扇子は、西谷と東谷とも同じ日の丸の扇子である。大きさに着目すると、西谷の扇子は東谷の扇子よりも小さい。これは男性原理と女性原理が逆転している。儀礼的な所作は、東西ともほぼ同じである。

⑦ 「米粉の餅」の呼称差

米粉の餅を、西谷ではシロモチと呼ぶ。それに対して東谷ではブトと呼ぶ。このように同じものであっても、西谷と東谷では表現の仕方を変えている。川端道喜『和菓子京都』によると、ブトは「餠飴」と書き、音読みでホウチウとも呼ぶ。これは唐の果物、唐菓子であり、奈良時代

に中国大陸から伝わった油で揚げた菓子であった〔川端 一九九〇 九二―九三〕。しかし中山では、ブトは「伏兎」の字を当て、白い兎が伏している姿であると理解している。ウサギは古代から山の神の使いとされてきた。木の種を撒き、秋には木の実を取りにやってくるとされていた。村人は山の神の日に白ウサギを見ることを恐れる風習があるという〔岡本 一九八九 五一―五二〕。ブトは米粉を水で練って、ハンギリの底に芋の葉を敷いてその上で平たく延ばし、下に敷いた蓮の葉ごと約五センチ正方形に切る。別の容器に移さずにそのまま祭場へ運び、祭場で一切れずつ配られる。

まとめ

芋競べ祭りの儀礼分析にあたっては、坪井論文と国立歴史民俗博物館の研究チームの詳細なモノグラフに依拠した。祭りでは、東西が対立して競いあうため、祭りを構成する各種祭具、服装、しぐさ、儀礼の各所に東西の独自性を主張する仕組みが埋め込まれている。それは東西という地域区分に留まらない。

本研究は、従来の研究で誤認されてきた事項や取り上げられなかった事項を見出し、それらの成果を「表1 西谷と東谷の比較一覧」として提示した。この一覧表を見てもわかるように、西谷と東谷に見られる〈競争〉や〈男性原理と女性原理〉以外にも、儀礼上の〈対抗と補完〉という原理を確認できるのである。そして分離・反発を和らげる〈連帯と協力〉の原理も内包していることを明らかにした。国立歴史民俗博物館の上野和男たちによると、西谷と東谷の集落はことあるごとに対抗的意識を見せており、祭りの準備過程でもさまざまな局面で、それが表出されていたという〔上野ほか 一九九一 一九三〕。

西谷と東谷は、何かにつけて差異を強調するが、それは視覚的にも明

確である場合が多い。芋競べ祭りの儀礼は、〈競争〉に特徴がある。〈競争〉の結果判定は、畑作物の象徴である芋を用いて稲の豊凶を占う構図になっている。昔は、勝ったほうの集落に田の畦草を自由に刈り取る権利が与えられたり、村の惣山の草を先に刈り取れる権利があったという。水利権や入会権も勝った集落が優先するなど、これは宮座の無視できない重要な側面である。現在は、勝った集落の一番芋、二番芋に御神酒・金一封・餅が贈られるだけである〔上野ほか 一九九一 一七四―一七五〕。

芋競べ祭りのクライマックスである芋打ちにおいて、三番尉は大仰な動作を繰り返しながら無言劇を延々と続ける。それは〈動（＝顕在）と静（＝潜在）〉という関係性として理解できる。時間の経過の中で、本来の意義が忘れられて記憶が薄れる中、過去の記憶すべき事柄を伝えるために、動作・しぐさに強弱を付けた儀礼の無言劇が仕立てられ、祭りの中にその伝承を込めて維持させてきた可能性がある。親芋から葉の先端までの長さを競い合った結果、今でも稲の出来具合が話題になるのはなぜであろうか。西谷は稲作優越地であり、東谷は畑作優越地である。地域の地勢にこだわるならば、稲作と畑作の優劣を競うべきではないだろうか。村の開発は当然のことながら稲作適地から開発されて、人口増加による耕作地の拡張としてそこへ人が居住する。開発と定住に関する両者の関係が祭りに反映されている可能性がある。

坪井洋文は芋を畑作の象徴とする立場を強調したが、芋の長さはあくまでも東西の集落が〈競争〉の結果を判断するための手段であり、芋の象徴性とは別物であった可能性が高いと言えよう。しかも、農業後継者の少ない現在、稲作の豊凶は切実な問題ではなくなっている。何が祭りを継承させる力になっているのか。それは儀礼の型であり、男性原理の強調や、女性原理の表出などである。それらを演技で表現するのである

から一種の芸能と言ってもよい。祭りの継承が切実な問題とされる現在、最終的に何が残るだろうかを考えてみると、東西の〈競争〉を反映する演出の儀礼の型こそが、祭りの由緒を語る重要な要素になっていくと思われる。

【謝辞】

現地調査に際しては、芋競べ祭り保存会長の望月喜三郎会長（当時）をはじめ保存会の皆様のご協力を得た。篠原徹氏、渡部圭一氏には現地調査のみならず、原稿執筆に際して各種アドバイスを頂戴した。日野町教育委員会の振角卓哉氏から芋打ちの結果記録をはじめ、色々とお教示をいただいた。以上、記してお礼申し上げます。

《注》

(1) 令和二年（二〇二〇）、COVID-19が感染拡大し、芋競べ祭りにも大きな影響を与えた。そして同年（二〇二〇）から令和四年（二〇二二）までの三年間、祭りは中止を余儀なくされた。コロナ禍は祭り当日の朝、東西の集落が三本の芋を各集会所に持ち寄り、芋競べ祭りに出す一番の芋の親芋から葉の先端までの長さを計測した。令和元年から令和五年（二〇二三）までの五年間における勝敗結果は、「表2 芋競べ祭りの結果」のとおりである。

(2) 正月三日に「山の神起こし」と呼ぶ行事が、西谷と東谷でそれぞれ別個に実施されている。ご神木に男女二体の人形を飾り付けておき、参詣者は持参したツトを注連縄に掛けながら「山の神起こし」や「早稲も良かれ、晩稲もよかれ、四十四の作り物、皆良かれ」と唱えて檜の棒で注連縄を揺らした。これは山の神を目覚めさせての野神にするという説明がなされている（岩本一九九一 二二六～二二八）。山の神が野神に交代するということであるのか。そのあたりが、芋競べ祭りが山の神の祭りであるのか、野神の祭りであるのかという混乱が生じる原因でもあるだろう。

(3) 筆者は、芋競べ祭りを見て、群馬県利根郡片品村花咲の武尊神社「猿追い祭り」の調査経験を思い出した。旧暦九月中の申が祭日であるが、祭りでは第一に境内で東西の役員が赤飯を投げ合う。それから割拝殿に戻って酒の応

酬をしながら東西が謡をうたう。その最中に本殿から猿に扮した白装束の者が出てくる。役員は謡を中断し、社殿を回る猿を追い回す。追うのだが猿を追い越すと不作になると伝承されている。すべて無言のマントマイム劇のようである。筆者は、この祭りの研究にあたって類例行事を探してみることにした。すると周辺の武尊神社では、同じ日に赤飯を撒いたり、拾いあったり、社殿のまわりを笹で叩きながら回ったりしていた。各地の武尊神社の祭りには類例行事が多く、いくつかの共通要素を見出すことができた（板橋 一九九二 二八～四五）。しかし猿が出る祭りは一箇所

だけであった。この芋競べ祭りは、その時の調査体験によく似ていると思った。

(4) 本調査は、令和元年（二〇一九）九月一日の祭りの見学である。滋賀県立琵琶湖博物館の展示リニューアルに伴う芋競べ祭り調査に同行させていただいた。同館では複数の調査者が西谷と東谷を同時進行で観察調査したが、筆者は東谷の調査を担当した渡部圭一氏に同行して観察調査を行うことができた。

(5) 矢田直樹「葛藤の狭間で生き続ける祭り——近江中山の芋競べ祭りからの報告——」によると、西谷の人口減少の問題は課題になっていたが、平成二十八年（二〇一六）に芋競べ祭りの主役である山若の人数が少なくなる危機が訪れた。保存会で話し合いの結果、東西で山若を融通し合える大幅なしきりの改訂が行われた。しかし実際には、西谷はやりくりして西谷だけの人員で山若を調達したのである。ここにも西谷と東谷の対抗意識が強く表れていたという（矢田 二〇二〇 三七～三八）。

(6) 宮座における行事執行を無言で行う事例は数多い。たとえば滋賀県野洲市三上の御上神社の祭祀を詳細に論じた真野純子によると、同社のずいき祭りにおける芝原式の構成においても、花びら餅を配ったり猿田彦の所作や客座

表2 芋競べ祭りの結果（2019～2023年）

		勝 ち		負 け	
令和元年（2019）	東谷	8尺5寸8分（206cm）	西谷	7尺（168cm）	
令和2年（2020）	西谷	10尺2寸9分（247cm）	東谷	9尺6寸7分（232cm）	
令和3年（2021）	東谷	10尺8寸1分（259.5cm）	西谷	8尺9寸2分（214cm）	
令和4年（2022）	東谷	9尺4寸6分（227cm）	西谷	8尺9寸2分（214cm）	
令和5年（2023）	東谷	9尺5寸（228cm）	西谷	8尺5寸8分（206cm）	

※ジョウジャク

1尺＝24cm

（振角卓哉氏提供）

での一献の宴でも一同は式終了まで無言のままであるという〔真野 二〇一五 一一一〇〕。

《参考文献》

- 板橋春夫 一九九六 「幣束を持つ〈猿〉——猿追い祭りの儀礼分析を中心に——」
『群馬文化』二四六号 群馬県地域文化研究協議会
- 岩本通弥 一九九一 「四節 芋くらべ祭りの周辺」〔近江中山の芋くらべ祭——映像民俗誌『芋くらべ祭の村——近江中山民俗誌——の記録』〕『国立歴史民俗博物館研究報告』三二集 国立歴史民俗博物館
- 上野和男・岩本通弥・橋本裕之 一九九一 「近江中山の芋くらべ祭——映像民俗誌『芋くらべ祭の村——近江中山民俗誌——の記録』」『国立歴史民俗博物館研究報告』三二集 国立歴史民俗博物館
- 岡本信男 一九八九 「近江中山芋くらべ祭」 中山芋くらべ保存会
- 岡本信男 一九九〇 「近江の芋くらべ祭——蒲生郡日野町——」『民俗文化』三二三号 滋賀民俗学会
- 川端道喜 一九九〇 『和菓子の京都』 岩波書店（新書）
- 北原（青柳）真智子 一九五六 「双分制の一例——滋賀県中山の芋まつり——」『史論』四集 東京女子大学学会歴史学部会
- 北原（青柳）真智子 一九五七 「日本における双分制——特に祭を中心として——」『民族学研究』二二卷三号 日本民族学協会
- 滋賀県日野町編 年不詳 『近江中山の芋くらべ祭り』 日野町
- 真野純子 二〇一五 「近江三上の祭祀と社会——民俗の歴史像を描く——」 岩田書院
- 蓼沼康子 一九九三 「近江中山の芋くらべ祭りと女性」『城西大学短期大学部紀要』一六卷一号 城西大学短期大学部
- 坪井洋文 一九八七 「芋くらべ祭——滋賀県蒲生郡日野町中山——」『国立歴史民俗博物館研究報告』一五集 国立歴史民俗博物館
- 中川泉三 一九一六 「江州中山の芋競べ祭」『郷土研究』四卷四号 郷土研究社
- 安井吉史 一九五八 「近江中山の芋競べ祭り調査報告書」 芋くらべ祭保存会
- 矢田直樹 二〇二〇 「葛藤の狭間で生き続ける祭り——近江中山の芋競べ祭りからの報告——」『文化遺産の世界』三七号 特定非営利活動法人文化遺産の世界
- 若尾五雄 一九七三 「百足と金工」『日本民俗学』八五号 日本民俗学会

日本地名学研究所（前身、大和地名研究所） と柳田国男 前篇二

——柳田国男と研究所との交流はいつから——

中 葉 博 文

四 大和地名研究所の取り組み

（一）草創期の取り組み——土地台帳記載の小字（俗称・古称）収集開始・『全国大字地名索引』作成開始

中野文彦は、昭和十七年三月十七日、奈良市で創設懇談会を開催したことを契機に、正式に大和（奈良）で地名を研究する民間の研究機関「大和地名研究所」を創設した。研究所は、当時、奈良県南葛城郡吐田郷村にあった中野の自宅（中野邸）内の洋館とした（写真①）。

さらに中野は池田末則を、この懇談会で招待者に直接紹介したことを契機（区切り）に、正式に所員として迎え入れ、あらためて、池田に奈良県内、各市町村の土地台帳に載る小地名（小字及び俗称・古称）の収集及び



写真① 大和地名研究所 1945. 11

呼称と地籍実測図の複写作業などの実地調査を命じた。池田は本格的に業務として実地調査に取り掛かることを決意した。

また、中野は、池田の他、嘱託員（助手）として楠良子、豊田律子、中山伊津子らも雇い、池田の行なう小地名収集と地籍実測図の複写作業と同時に『全国大字地名索引』¹⁾の作成にも着手した。

「大和地名研究所」は、所長中野、所員池田他若干名による純然たる民間研究所として誕生した。

しかし、当時は、ちょうど太平洋戦争に直面し、翌十八年、池田は海軍を志望し海軍航海学校に入学することとなった。そして、池田は同二十年の終戦まで研究所を離れることとなる。

だがその間、中野は今まで池田が収集した奈良県内に関する小地名のデータ整理や、『全国大字地名索引』に関するカード整理、そして池田が同学校入学前に中野に伝言した地籍実測図複写作業を、嘱託員三人に続けさせた。

中野は、池田が海軍航海学校に入学する直前まで収集していた小地名を編集し、大和地名研究所編として『大和志』（昭和十八年一月二十日発行の通巻百号から同年二月一日、同年四月一日、同年五月一日、同年七月一日、同年九月二十三日、同年十月二十日の通巻百九号まで計七回にわたって）に「大和地名集」（資料）として成果を報告した。²⁾

昭和二十年八月終戦となり、池田は終戦と同時に研究所に復帰した。しかし、敗戦後の混乱した社会情勢の中であつた。

だが、中野・池田は同二十年末には、研究所のメイン事業である小地名の収集及び呼称は、当時の奈良県の吉野・宇陀・山辺郡を残して各郡別小字五十音索引も一応完了し、その後、この複本（『県内各郡別小字索引』³⁾）を作成して、同二十三年頃までに、奈良県立図書館に寄託している。

当時の館長は、高田十郎の奈良県師範学校時代の教え子である仲川明

だった。⁴⁾ 仲川は、大正十四年から同館の司書として勤務し、館員のかたわら、高田が設立し自ら会長を務めた奈良郷土会・奈良県童話連盟の発足に関わり、図書館に事務局を置き支えた。仲川は、大和国史会の会員で郷土史家であり、童話家・俳人でもあった。

また、仲川は、柳田の論説「和州地名談」が載る『奈良叢記』（駁々堂 昭和十七年一月発行）の編者の一人だった。

（二）伸長期の取り組み―『大和地名大辞典』刊行、それをもとに

池田が復員し、敗戦後の混乱した社会情勢が漸く落ち着いてきた頃、中野は、昭和二十三年七月十五日、国から「教育委員会法」が公布施行され、同年十一月一日の発足を目途に、十月五日、奈良県で第一回教育委員選挙がおこなわれ、中野ら六人が教育委員に選出され、さらに十月二十五日に、もう一人県議会で選出されたものも加わり、十一月一日、県議会議員控室で第一回教育委員会が開かれた。中野は、同年十一月一日から同二十七年十月三十一日まで教育委員を務め、その間、同二十三年十一月一日から翌二十四年十月三十一日までの一年間は、初代教育委員長⁵⁾の重責も担った。

一方、池田は保育会・少年保護司として、当時、池田の住む南葛城郡御所町から東方にある同郡掖上村の掖上保育園の園長や県の社会福祉協議会に関わるなど、二人とも予期せぬ公職をもち、数年間、研究所は麻痺状態が続いた。

それでも、中野・池田は多忙の合間を縫って、中野は、池田に適切な指示を出し、池田は奈良県内の戦前に踏査した以外の吉野・宇陀・山辺郡の小地名収集のために、各郡の町村役場に行き、土地台帳の各大字に載る小地名（小字）を写した。そして、その大字のある現地に行き、小地名（小字）の呼称を聞き、さらに、俗称や古称地名をも収集し、呼称も聞くと言う、気の遠くなるような地道な調査を、戦前から戦後の混乱

期から暫く経った頃まで行った。奈良県内の延べ千百有余の大字を踏査し、約二千人の古老から聞き取りを行った。聞き取ったカードは、研究所の嘱託員三人が整理した。

生前、池田は筆者に、「中葉君、戦争中、ある村役場で土地台帳に載る小字を調べていると、この若いもんが、何やこんなこと調べて、この非国民！」と言われたことが何度もあったと。当時の公簿閲覧費が、例えば、磯城郡耳成村（現橿原市耳成）・高市郡新沢村（現橿原市新沢）では、確か十銭だった。」と、池田が、戦争中に現地調査に行った時のようすを話してくれたことがあった。中野・池田は、多忙の中、この頃、研究所から『奈良縣郷土生活文化史年表』や『私たちの社会』（南葛城郡編上巻）を発刊している。

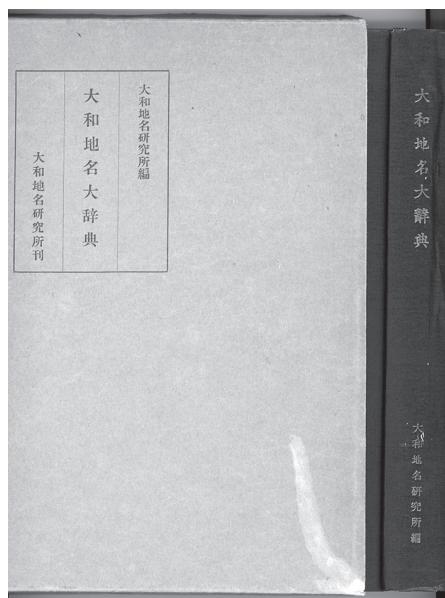
しかし、中野・池田の思いは、長年懸案である奈良県内の全小地名（小字・俗称・古称）を収集した冊子（『大和地名大辞典』）を一刻も早く発刊することだった。

紆余曲折は、あったが同二十六年八月漸く印刷に着手できるに至り、一年余を経て、中野は翌二十七年十月一日に、大和地名研究所編『大和地名大辞典』を上梓した（写真②）。

戦前から戦後の混乱期における大和地名研究所として、『大和地名大辞典』の発刊は、大きな成果であり、一つの画期的な事業であった。

研究所では、『大和地名大辞典』をもとに、池田らが、同二十七年十一月から毎日新聞（奈良版）に「奈良県市町村地名考」を連載した。翌二十八年二月に、研究所から、この連載された論考を『大和郷土名のゆかり（奈良県市町村地名考）』を出版している。さらに、二十九年二月には、『私たちの社会』（北葛城郡編）も発刊した。

中野は、池田を公私にわたって、池田が所員として「地名研究」に専念できるよう助言・支援をして支えた。池田は、中野の人脈や研究所の



写真② 大和地名研究所編『大和地名大辞典』
1952. 10

小地名・地籍図実測図の複写作業などの実地調査の業務で、自らが培った人脈を活かして、同三十年四月の『大和馬見町史』を皮切りに、県内の多くの自治体（市町村）史で、自ら地名に関する論考を執筆し、またそれぞれの自治体史全体の編集にも関わることとなる。

ちょうど『大和地名大辞典』が刊行された翌年の昭和二十八年九月一日公布の「町村合併推進法」が十月一日に施行された。太平洋戦争以後における日本の地名の改称や新規命名としては、大きな起点となった。

この法律によって、奈良県内でも新自治体において自治体史を作成する動きも起こり、池田や創設懇談会に招待された歴史・民俗・郷土史に造詣の深い人たちははじめ、県内の多くの研究者らも携わり、新自治体においても、「カタチ」にできたという点においては良かった。しかし、デメリットもあった。

生前、池田から次のようなことを聞いたことがある。「『大和地名大辞典』刊行後のちょうど一年後に施行された「町村合併推進法」の後、（この法律施行後に）中野先生と鏡味先生の手紙のやり取りが本格的に

はじまった。研究所は、県内の多くの先生方に支えられ、さらに柳田先生ご自身をはじめ先生の奈良の知り合いの先生方からも良き全国の地名研究者の情報を多くもらった。その好例の一つが、中野先生と鏡味明克先生のお父さん、完二先生との手紙のやり取りだよ。また、中野先生は、この法律で町村合併が進んで新町村名が必ず名づけられるが、ちゃんとした地名が付けば良いが。新町村名の名づけられ方にいつも嘆いておられた⁽⁸⁾。ということを、よく池田から聞いた。

中野が、長年、地名研究に力を注ぐのは、家業の林業にも大いに関わる土地のことである。この土地の名称である地名が、明治以来、市制・町村制の施行と同時に強行された全国一斉の町村合併により、合併によって成立した新町村には、必ず新しい名称が名づけられる。新町村名が名づけられるごとに、その土地の小地名も消滅する危機に晒され、また、新町村名も「合併各町村間の妥協の産物ともいえる人為名称や合成名称」が多数誕生するということへの嘆きであったのか⁽⁹⁾。

前記したように、その頃、中野（・池田）と柳田が交流したという証の書簡はないが、柳田は、中野が昭和十七年三月十三日に、「大和の地名研究に関する懇談会」を開催したこと、あるいは事前に開催することを、水木をはじめ、柳田と交流する歴史・民俗学関係の大和の同志の誰かから情報を知った。あるいは知り得ていたことは確かだと思う。また、筆者が生前、池田や中野と接して、二人の人柄から、『大和地名大辞典』を、柳田に恵贈していたと思われる。この恵贈も一つのきっかけとなり、中野（・池田）の大和地名研究所と柳田との交流も、今まで以上に深く交流することになったと筆者は考える。

（三）柳田国男の地名情報からの大和地名研究所の「存在」——山口弥一

郎と鏡味完二のことから

三人（中野・池田・柳田）が、今まで以上に深く交流したと考えるも

う一つの訳は、二人の地名研究者との繋がりがからである。二人とは、山口弥一郎と鏡味完二である。

山口は、後に「地名学研究会」の会員に早々になり、大和地名研究所から日本地名学研究所に改称された翌年に、同研究所の出版物「地名学選書」シリーズの第一目として、山口の自著『開拓と地名』を中野が研究所から出版している。次に鏡味の著作も、後に日本地名学研究所から「地名学選書」の第二目として出版されている。同研究所の「地名学選書」を含む出版物については、機会をあらたに別稿で述べたい。

ここでは、まずは山口と柳田との出会い、そして、柳田の地名研究を継承する山口と中野との出会いについて記す。山口は、自著『開拓と地名』の「序」で「：地名こそは我々が国土に住みつき、地と人とを繋いだ記録である。：私等は今も柳田、田中館岡師匠の教えられた研究態度を続けてゆけばよいとさえ思っている。：この著は最初民俗学研究所同人が民俗学叢書としてひき受け、柳田先生より貴重な地名カードを貸与され、陸中に存住してまとめたものである。その後七、八年のめまぐるしい変遷をうけて、原稿を持ち廻り手を加えたが、その後再び篋底よりひきだす機会を得ないでいた。しかし一応世の中に問うてみる価値を信じ、熱意を失わないで通したので、京都に日本地名学研究所が設立された機会に、特に中野文彦氏の御好意により今度出版する運びとなった。永く御指導御鞭撻をいただいた諸先生と出版に御助力載いた中野氏に厚く謝意を申述べる。：⁽¹⁰⁾」と述べている。

山口の著書発刊において、山口は柳田との地名に関する色々な情報交換が起因し、日本地名学研究所からの出版となったのではなからうか。まずは、山口と柳田との交流は、昭和十年一月、この月、柳田が佐々木彦一郎を通じて山口の書いた「炭鉱民俗誌」の論文を見せられ、このことから柳田が山口宛てに葉書を書き送ったことからはじまる。その後、

柳田が山口の住む福島県会津若松市の近くに来た時、山口と会い、柳田が泊まる宿も山口が手配するなど交流が深まっていた。

昭和十七年一月、柳田は『奈良叢記』で「和州地名談」を発表する。

その同年三月に、奈良市で大和地名研究所を創設する懇談会が開催される。同懇談会に中野から招待された約半数は、柳田の奈良での知り合いで、この大和地名研究所が創設された情報は、山口に間接的にあるいは柳田から直接的に聞いているやに思われる。山口は、同年の十一月十四日に、柳田を訪ね、自らの地名研究、東北地名の研究などの考えを話している。また、翌十八年六月六日、同年十二月十九日にも、山口は柳田を訪ね、地名研究について話している。⁽¹¹⁾

山口が自著の「序」で書いているように、最初民俗学研究所同人が民俗学叢書としてひき受け、柳田より貴重な地名カードを貸与し、山口は原稿をまとめる。山口も、この頃から大和地名研究所の存在を知りつつ、戦中・戦後の混乱期となるが、地名研究の熱意は失わず、それから世の中が落ち着きを取り戻した頃の同二十七年に、大和地名研究所編『大和地名大辞典』が刊行された。その頃も、時折、山口は柳田を訪ねている。

山口は、柳田を訪ねた折に、そこで出会う民俗学関係の人たち、あるいは日本民俗学会年会などの研究会を通して出会う会員同士での交流から培った人脈から、後に京都に日本地名学研究所が設立される情報を得て、創立されるとすぐに「地名学研究会」の会員に名を連ねる民俗学関係の研究者と同様、会員となる。その頃、中野も山口の地名研究に対する研究姿勢や、更に、柳田とも古くから親交があり、山口が柳田の地名研究を継承し、柳田を師匠と仰ぐ関係にあることも鑑み、中野が山口に出版依頼をしたと考えられる。

次に、鏡味完二と三人（中野・池田・柳田）との繋がりについて述べる。中野は、前記したように無類の読書家で、柳田国男の『地名の研究』

（昭和十一年発行 古今書院）をはじめ、地名に関する多くの文献を、地理学・言語学・歴史学・民俗学など学際的に読み収集もしていた。

そんな中、中野は『地理学評論』（日本地理学会編）など、地理学から「地名の研究」を積極的に行ない発表している鏡味完二を知る。

一方、鏡味は、愛知県生まれで、昭和十四年に麻布中学校（のち麻布高校）教諭となり、東京に赴任する。翌年、文部省高等科教員検定試験（高検）地理科に長井政太郎と共に合格する。この頃から辻村太郎の示教を受け、海岸の地名に精力を傾注していく。その後、鏡味は同十九年（助東重研究所嘱託となる。鏡味は、同年十一月五日、柳田の自宅を訪ね、柳田に地名の研究することを言い、柳田から色々と地名に関する情報をもらっている。

翌（二十）年、空襲によって、鏡味は自作の地名のカード・分布図・研究資料をすべて焼失し、敗戦を迎えた。鏡味は、翌々（二十一）年名古屋帝国大学環境医学研究所の助手に就任。名古屋に帰任するも、病氣療養を強いられる。同二十四年名古屋市立川名中学校教諭、同二十六年名古屋市立工芸高等学校教諭となり、再び中等学校教員として教育活動に従事するとともに、地名の研究も本格的に再開する。⁽¹²⁾ また、鏡味は、しばらくして、同校教諭と愛知学院大学講師を兼務することとなる。

鏡味は、以前、柳田を訪ねた時に、柳田から得た地名情報の一つとして、柳田からたぶん聞いたと思われる中野の大和地名研究所の存在を、この頃から意識し、同研究所の『大和地名大辞典』が、同二十七年十月一日に発刊される半年前から、本格的に中野と鏡味の手紙のやり取りが始まった。

そのきっかけは、鏡味が以前に柳田を訪ねて大和地名研究所の「存在」情報を知り、中野は鏡味が現在住む愛知県の『愛知県地名調』のこ

『地名調』の存在情報で確かなものにし、鏡味の方から中野との手紙のやり取りがはじまった。

中野は、学術雑誌『地名学研究』（創刊号）の「参考文献解題」の「明治十五年愛知県郡町村字名調」の欄で、「…鏡味完二氏の御周旋により去る昭和二十七年六月…」と記している。⁽¹³⁾

中野は、池田とともに、多くの人たちに支えられ多くの研究者とも交流しながら、奈良県内に関する地名を中心に地名研究を行い、研究所も順調に運営していた。

おわりに―奈良・大和地名研究所から京都・日本地名学研究所へ

中野は、昭和二十九、三十年頃、週に一・二度、家業の林業に関する事務所がある大阪に通いながら、自らの「和歌の研究」や地名に関する研究、そして研究所の運営・事業企画の施策などを行っていた。

中野は、「…昭和二十七年に『大和地名大辞典』を刊行し、「奈良には地名の研究が存在する」といふ程度には認識して頂いていたと思ふ。

戦後の農地改革、学制改革、更には漢字仮名遣の問題など、まさに大改革の連続…、近年の自治庁の方針に基づく町村合併も、明治二十二年の町村制実施以来の大事件である。…地名は土地に即したものでなければならぬ。…昭和改革の新地名の水準を高め度い…一つの発表機関を持つ…互いに研究方法を語り合い、研究の成果を示し合ひ、同じ骨折を繰返すことのないよう…大いに地名学の必要性と存在とを主張しよう…。」と述べている。⁽¹⁴⁾

中野は、前述したこの思いから、自ら今まで培った人脈や、また、池田がこれまでに培った人脈を踏まえ、地名の研究の「輪」を更に広げたいと、全国的な地名研究組織を立ち上げた。また中野は、地名に関する学術雑誌も発刊したいという思いを、昭和三十年のとある日、池田源

太・土井實そして池田末則を、京都の別邸に招き、その思いを伝え直接相談した(写真③)。

そして、翌三十一年、

中野は、奈良から中野の別邸のある京都市伏見区桃山長岡越中に移り、研究所名も大和地名研究所から日本地名学研究所に改称すると共に、全国的な地名研究に関する研究組織「地名学研究会」の立ち上げとその準備、さ

らに同会の学術機関誌『地名学研究』創刊号の発刊に向けて、関係各位に協賛・協力・支援・入会、更には他者への啓発・入会等の依頼をするため奔走した。中野は、池田末則と共に、池田源太・土井實らと頻繁に会い相談した。さらに、以前から、中野が手紙のやり取りで交流していた鏡味完二と、昭和三十二年早春に、中野は池田と共に、直接、鏡味と会って、全国的な研究組織の設立とそれに伴う学術雑誌『地名学研究』創刊に向けて相談した。中野（・池田）は、最終的に池田源太・土井實・鏡味完二らと「地名研究会」設立に向けて色々と相談したことを土台に、その後、多くの関係各位の協力・支援・協賛によって、全国規模の地名に関する研究組織「地名学研究会」を、日本地名学研究所内に事務所を置き、同年早春に立ち上げた。



写真③ 京都の中野別邸（後の日本地名学研究所の中野自室）
左から土井實、中野文彦・池田末則・池田源太 1955)

中野は、全国的地名研究組織「地名学研究会」の立ち上げ、そして同会の学術機関誌『地名学研究』も創刊した。中野が第二號の『地名学研究』の「巻頭」に載せた柳田からの礼状に書き記す柳田の「：昔のよしみにて小生：」という「昔」というのは、中野・池田の日本地名学研究所、前身の大和地名研究所からの長きに亘る、昭和十七年の大和地名研究所創設前後を起点に、三人の交流がはじまったことだと思う。

また、中野が全国的地名研究組織「地名学研究会」を立ち上げる大きな要因の一つに、第二號に載る同会の「會員並びに協賛者名簿」からもわかるように、柳田の奈良をはじめとする全国各地の柳田と交友関係にあったと考えられる人たちが、名簿に多く載っていることから明らかのように、柳田からの間接的あるいは直接的な働きかけによる尽力も大きかったと思われる。

柳田の自らの一生を回顧した聞き書き『故郷七十年』の「私の学問」を語る中で「：。地名の研究は、どうしても地理学と提携しなければ出来ないことである。近ごろやっと日本地名学研究所というのができて、本も出るようになった。」⁽¹⁵⁾と述べられている。

この一文の裏には、柳田と中野・池田との日本地名学研究所の前身である大和地名研究所頃からの長きに亘る三人の交流があり、また、その頃の日本の地名研究の状況をも込められているのである。

(すべて先生と敬称付けるべきであるが、省略した。お許しいただきたい。)

※ 機会をあらたに、前稿の前編一と、今回の前編二を踏まえて、昭和三十一年に研究所を奈良から京都に移転し、研究所名を大和から日本地名学研究所に改称する数年前から同四十一年に再び研究所が奈良に再移転するまでの十数年間において、日本地名学研究所(中野・池田)と

晩年の柳田國男との交流から、当時の日本の「地名研究」において、日本地名学研究所の果たした役割などについて、別稿(後編)で私見を述べてみたい。

【謝辞】

本稿を作成するに当たり、小田富英編『柳田國男全集 別巻一』(筑摩書房 二〇一九年)の「柳田國男 年譜」を大いに活用し論考を進めることができた。編集された小田富英氏に感謝申し上げる。

また、本稿に載る奈良に関する郷土史や自治体史の発行年の確認において協力してもらった近畿大学大学院総合文化研究科の水上亮輔君にも感謝を申し上げる。

註

(1)『全国大字地名索引』は、昭和二十二年に完了した。『同索引』は、出版の機熟さず稿本のままだったが、その後、昭和五十五年十二月、日本地名学研究所編『日本歴史地名総索引(全三巻)』名著出版から刊行された。

(2) 中野は、『大和志』に昭和十八年一月二十日発行の通巻百号から同年十月二十日の通巻百九号まで計七回、「大和地名集」を発表した後、自らの「語彙研究」について、『同』に「吉野山林語彙(一)」(通巻百十四号 一九四四年三月二十五日)「吉野山林語彙(二)」(通巻百十五号 一九四四年四月一日)を発表している。前者の「大和地名集」は、『同』(同十七年四月一日発行号)の「編集後記」に、田村が書いているように大和地名研究所の成果(報告)として掲載し、後者に中野の「吉野山林語彙(一)」(二)を掲載した。この前者と後者の原稿の原稿内容などから田村は、中野・池田との長年の深い絆(間柄)や柳田との長い信頼関係から、中野が記した「吉野山林語彙」の原稿内容やこれからの研究所の事業が充実・発展するよう、さらには、柳田は長年、大和の地名を注目していること、また、「大和地名集」の基礎となる地名を収集した池田は、戦争により海軍航海学校に入り奈良に不在など、編集人である田村は色々なことを配慮して、中野とも相談し、昭和十八年、翌十九年に掲載したのである。

(3) 大和地名研究所編『大和地名大辞典』中野文彦「序」大和地名研究所 昭和二十七年十月一日

(4) 『奈良県立奈良図書館報 うんてい No.74』二〇〇三年三月三十日の温故知新「仲川明」の文の中に、「昭和二十年から二十四年まで館長を務める。」と記す。大和国史会の『大和志』(通巻二十二號 昭和十一年七月一日)に、仲川の資料「奈良の古地圖―奈良古地圖展―」が掲載され、さらに、仲川は後の「地名学研究会」の会員で、『地名学研究』創刊号に論考(「石神と笠神」)も載っている。

(5) 奈良県教育委員会『奈良県教育百年史』昭和四十九年二月二十八日を参考。また、中野が教育委員の頃、「教育委員会事務局には、学務課長として土井實、図書館長として仲川明が勤務していた。」ことが、「○奈良県教育委員会委員長 中野壯次 ○奈良県教育委員会事務局 学務課長 土井實 図書館長 仲川 明」(印刷廳編『職員録』印刷廳 昭和二十四年十二月五日)から分かる。

(6) 大和地名研究所編『大和地名大辞典』(発刊後、第一回奈良県文化賞を受賞した)。中野文彦「序」昭和二十七年十月一日発刊。『同』索引編が、日本地名学研究所編『同 続編』昭和三十四年七月十五日に、日本地名学研究所の「地名学選書」の一つとして発行される。大和地名研究所編『奈良縣郷土生活文化史年表』(昭和十五年四月)や『私たちの社会』(南葛城郡編上巻 同十六年四月)に発行。『同』(南葛城郡下巻)は、翌十七年四月に発刊している。

(7) 『大和馬見町史』の他に、研究所(大和地名研究所)が奈良から京都に移転する同年三十一一年までに、『二上村史』、『当麻村史』、『大和下田村史』、『志都美村史』(同三十一年三月発刊)などに関わった。池田は、その後も奈良県内の多くの自治体史に関わる。中野が研究所創設するために懇親会に招待した人たちの協力・支援・助言が、池田の自治体史に関する企画・編集・運営においても支えとなった。

(8) 生前、池田から鏡味完二と中野と知り合うきっかけについて聞いたことがある。その時に、中野の町村合併によって命名される新町村名に対する中野の嘆いていたことも池田から聞いた。

(9) 『歴史百科』(第5号)「日本地名事典」[「明治の地名」]「大正・昭和の地名」新人物往来社昭和五十四年五月二十日

(10) 山口弥一郎著「開拓と地名」(地名学選書) 日本地名学研究所

(11) 小田富英編『柳田國男全集 別巻一』筑摩書房 二〇一九年三月二五日

(12) 「十一月五日 東亜研究所の鏡味完二が来て、地名の研究をすると言い、いろいろと聞いていく。」(小田富英編『柳田國男全集 別巻一』筑摩書房 二〇一九年三月二五日)と、岡田俊裕『日本地理学人物事典〔現代編1〕』[「鏡味完二」原書房 二〇一四年七月を引用・参考。

鏡味が柳田から大和地名研究所の存在を聞いたほかに、柳田から得た愛知県の名に関する情報として、明治十五年頃に内務省地理局が各府県に命じて報告させた数千冊にも及ぶ龐大な地名集が、東京帝国大学図書館に保管されていたことは柳田國男の『地名の研究』にも記されている。それら貴重な資料が大正十二年の関東大震災で全部焼失した。幸い愛知県の報告書(「明治十五年愛知県郡町村字名調」)の控えが尾張徳川家の蓬左文庫に保管されていて、昭和七年愛知教育会から刊行された。尤も刊行部数が非常に少なかつたらしくほとんどみることができなかった。この愛知県の書がある存在は、柳田の『地名の研究』にも記されていた。昭和十九年、鏡味が東亜研究所嘱託の頃、柳田を訪ねた時に、柳田からこの愛知県の報告書の存在を聞き、その後、その情報を中野に御周旋したこと、鏡味と中野の手紙のやり取りが本格的に始まったともいわれている。その時期が、昭和二十七年六月頃である。

内容は郡、町、村及びその字名の集録で、町村以下全部に互って振り仮名が付けられている。字名の下に更に小字名(大字(旧村)に対する小字ではなく更に小さいもの)を記入した箇所もあり、総数は十万を超える大変貴重な資料本のこととも聞いたと考えられる(『地名学研究』創刊号)。

(13) (12)と同註。

(14) 地名学研究会『地名学研究』(創刊号) 中野文彦「刊行にあたって」昭和三十三年三月三十一日発行。

(15) 朝日新聞社から朝日選書7として発行された柳田國男『故郷七十年』の三二〇頁に載る文を引用した。

参考文献

・日本地名研究所編集・監修『地名と風土』(第十四号) 中葉博文「我が恩師、池田末則の人物像と「地名論(地名伝承論)」」日本地名研究所 二〇二〇年三

月

- ・池田末則『日本地名学研究所五十年史―池田末則編著書目録』日本地名学研究
所編 一九九〇年（非売品）
- ・日本地名研究所編『日本地名研究所の歩み』日本地名研究所 二〇〇一年
- ・池田末則『地名伝承学』日本地名研究所編 二〇〇二年五月（非売品）
- ・池田末則『地名伝承学論』（補訂）クレス出版 二〇〇四年六月
- ・池田末則『地名の考古学―奈良地名伝承論』勉誠出版 二〇一二年九月
- ・奈良県史編集委員会・池田末則著『奈良県史 第十四巻 地名』名著出版 一
九八五年十一月

雑報

月例談話会

日時 毎月第三日曜日、午後一四時―一六時三〇分に、月例談話会を行
っています。参加ご希望の方はお申し込みください。会場等をお知ら
せします。

内容 事前に発表者と発表内容を決めず、当日の参加者のうちの希望
者が発表しています。情報交換や相談の場としても利用されています。
申込み方法 会誌『西郊民俗』末尾に記載の連絡係のメールアドレス
にEメールでお送りください。郵便の場合は、連絡担当の住所あてにお
送りください。

会場 東京都内貸会議室（例、JR飯田橋駅付近）。今後、変更の可
能性もあります。会場費をいただきます。

会のホームページをご覧願います。変更等、逐次ご確認願います。

第八五〇回 令和六年九月一五日（於…本郷四丁目）

福井県福井市一乗谷安波賀春日神社と『眞雪草紙』と『越前名蹟考』

林 京子

節供における人形の誕生―ひとがたから依代へ― 史 乃琛
大將軍信仰とその周辺―湖北今津町大床の大將軍神社― 小池 淳一

第八五一回 令和六年一〇月二〇日（於…飯田橋）

「簗簗」神吉日の説話

滋賀県高島市新旭町太田地区の墓制について

上巳、端午、七夕における「植物」、「浄化」、「人形」

民間説話・略縁起が生んだ民衆画

―紫式部の硯・弁慶の鐘・嫁威しの面―

吸物と雑煮

小池 淳一

林 京子

史 乃琛

久野 俊彦

榎本 直樹

第八五二回 令和六年十一月一七日（於…本郷四丁目）

修験が持ち伝えた『簗簗』―奥州胆沢吉祥院の慶長十六年写本―

上巳、端午、七夕における「キヨメ」

民具の魅力と価値を伝えるには

小池 淳一

史 乃琛

久野 俊彦

新入会員（令和六年）

秋野淳一

齊藤やよい

鷺山 厚

渡邊浩貴

『西郊民俗』バックナンバーのPDF掲載

ホームページに会誌『西郊民俗』PDFの掲載を始めました。『西郊
民俗』バックナンバーのページで、該当号の「PDF」をクリックする

と、表示されます。第二五八号（二〇二二年三月発行）から掲載して
います。会誌刊行の一年後に順次掲載します。著作権は執筆者に帰属しま
す。個人の研究目的の範囲でご利用ください。

問い合わせ先

連絡担当（会誌送付・入退会・談話会等）

榎本直樹 〒350-1123 埼玉県川越市協田本町二六―六

ドルチェ川越四〇九

Eメール inari@ceres.ocn.ne.jp

編集担当（原稿送り先） 投稿案内は表紙見返しに掲載

久野俊彦 〒329-0433 栃木県下野市緑四―六―七

Eメール hto4sano@yahoo.co.jp

西郊民俗 第二六九号

令和六年（二〇二四）十二月十五日

〒一一二一〇〇五

東京都文京区水道二―三―一五―四〇三 小池方

西郊民俗談話会

振替口座 〇〇一八〇―二―八九四四〇